

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般-113

学校名・団体名	熊本市立託麻西小学校
HPアドレス	http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/school/e/takumanishies/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた 国語科授業
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>本校は、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた国語科の授業改善を行うことで、子ども達の学力アップに努めている。通常学級に在籍する学びにくさ（授業に集中できない、音声言語だけでは内容理解が難しい、文字を読んだだけでは内容理解が難しいなど）をかかえた子どもにとってわかりやすい授業の工夫をおこなうことで、全員の子どもが授業に参加し、内容を理解できる授業を心掛けようというものである。</p> <p>研究の結果、ICT機器を使った視覚化の有効性が明らかになった。</p>	

研究主題 「わかる、できる」を実感できる学習活動の創造 ～ユニバーサルデザインの視点を取り入れた国語の読む力を高める授業づくり～

1 研究のねらい

「授業中つい他のことが気になり集中できない」「話を聞くだけでは理解できない時があり聞き漏らしが多い」「文章を読んだだけでは、書いてあることを理解できない」などの学びにくさを抱えた子ども達への手立てを考えることで、全員が「わかった、できた」と実感できるような授業改善を目指している。

2 これまでの取組

本研究も3年目を迎えた。1年目は、子ども達が授業に集中できるように全教室の前面掲示板にカーテンを設置したり、時間の可視化のためのタイムタイマーを用意したりして環境整備を行った。授業づくりでは、ICTや挿絵を利用するなど、焦点化、視覚化、共有化を視点とした手立ての工夫を試みた。しかし、その手立てが、教科の目標達成に繋がっていないという課題が残った。本来、手立てであるはずのUDの視点にこだわりすぎて、国語科の本質を見失った授業になってしまうことがあった。

そこで、2年目の昨年は、国語科のねらいに迫る指導の工夫、評価活動となるように、教材研究の方法から研修し、より焦点化された授業づくりを行った。授業者は、全員理解のために単元の目標や内容を下げるのではなく、全員が目標を達成できるような手立てを考えるようになった。課題として、習得・活用につながるようなさらに深い学びとするために、共有化で子ども達が主体的に学ぶ場の設定が不可欠であることが明らかになった。

そして、3年目の今年、全員参加から全員理解の授業づくりを目指して、重点事項を以下のように定めた。

2. 本年度の重点事項と取組の実際

(1) 学びに向かう「テンポある導入の工夫」

単元で出てくる新出漢字や慣用句などをタブレットに保存したデジタルフラッシュカードで提示した。全員が声を出すことで、休み時間から学習時間への気持ちの切り替えができた。また、「この語句を本文中から探そう」と投げかけることで、「教科書〇ページを開きなさい。」と言わなくても、子どもたちが、自然に教科書やノートを開いて授業が始められるようになった。短時間で、しかもクイズ形式で授業の導入を行うことにより、子どもたちの学習意欲と集中力を高めることができた。毎時間続けることで、音読・漢字の読み書きなどの基礎基本の力をつけることができた。



(2) 学びを深める「共有化・発問の工夫」

低学年や本文の叙述を正確に読み取ることが苦手な子どもたちにとって、挿絵は有効な手立てである。タブレットに保存した挿絵を用いることで、着目したい部分を拡大して提示することができ、焦点化が図れた。挿絵を見て「ジャンプしている。」と話す子どもたちに、「お話のどこに書いてあるかな？」と問いかけることで、文章中の表現「とびはねて」に着目した。さらに、動作化へとつなぐことで主人公の喜びを体感できた。

また、ふねのつくりで発見したことを発表する子どもが、自分でタブレットを操作しながら説明することで、音声言語の未熟な点を補うことができ、自分の考えを伝えることができた。また、聞いている子どもたちにとっても音声言語だけの説明よりわかりやすく、友だちの考えを共有することができた。



(3) 学びを実感する「振り返り活動の充実」

授業の最後に今日の学びを振り返る際、子どもたちが書いた文章をタブレットを使って大型テレビに映し出すことで、話し手・聞き手両方にとって有効な手立てとなった。

また、タブレットのビデオ機能を用い、深く読み解く前の音読と読み取った後の音読を比較することができ、その変化が明らかとなり、子どもたちが、自らの学びを実感することができた。

3. 成果

子どもたちの活動の様子を再生しながら作文にまとめたり、算数で数え棒などを使っての操作を映し出して共有したりと全学年・全教科において有効な取組を実践することへとつながった。